

Glocal Tenri



4

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.12 No.4 April 2011

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
心にひびく話し方・書き方
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (64)
その他の文書⑦
／安井幹夫 2
- ・ 天理教海外伝道の資料 (16)
上海伝道関連史料⑩
／深川治道 4
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (78)
コンゴ伝道に見る異文化接触 [44]
／森 洋明 5
- ・ 今日時代における宗教批判の克服学 (28)
聖俗概念の“脱構築”と宗教
／金子 昭 6
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の
民族誌学 (25)
カオナとケキピ
／井上昭洋 7
- ・ 世界平和のための宗教対話 (25)
カソリック：法王の一日
／山口英雄 8
- ・ 天理スポーツ (11)
天理スポーツ シンポジウム①
／難波真理 9
- ・ アメリカ通信 (1)
バークレー留学体験記：ユニークな文
脈、奇妙なテキスト
／深谷耕治 10
- ・ 図書紹介 (60)
『告発・現代の人身売買 奴隷にされる
女性と子ども』
／堀内みどり 11
- ・ English Summary 12
- ・ おやさと研究所ニュース 13
「代理出産」を論じるシンポジウムにパネリスト
参加／障害者の権利条約批准における我が国の課
題／「学術における男女共同参画推進の加速化に向
けて—アンケート調査結果の分析をてがかりに—」
(日本学術会議)に参加／天理スポーツ シンポジウ
ム 2011「未来を創る！～天理 障害者スポーツ～」
開催／国際女性デー記念シンポジウム「ケア、国
際移民、ジェンダー — 日仏対話」に参加／連
載執筆者紹介／平成 23 年度公開教学講座のお知
らせ

巻頭言

心にひびく話し方・書き方

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

『これからの「正義」の話をしよう』という本が話題になっています。これは、米ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の「Justice (正義)」という大学の講義をまとめて上梓したものです。

このタイトルを見れば、「正義」とは何か？についての新しい定義でも示されるのかと期待をしますが、実はそうではありません。この本は、功利主義、リベラリズム、コミュニタリアニズムの立場からの正義の概念を、ベンサム、カント、アリストテレスなど、過去の哲人たちの論考を下敷きにして紹介しているだけで、そこに特別に新しい思想が述べられているわけではありません。

彼自身はコミュニタリアンで、「今の政治的議論の大半は、福利と自由を中心にまわっている。つまり、経済的生産性の向上と人権の尊重が中心になっているが、美徳の概念や共通善についての価値を政治的議論の中に取り入れるべきだ」と主張し、結論として、「公正な社会は、ただ効用を最大化したり選択の自由を保障したりするだけでは、達成できない。公正な社会を達成するためには、善良な生活の意味をわれわれがともに考え、避けられない不一致を受け入れられる公共の文化をつくりださなくてはいけない」と言っているのですが、この程度のことは、普通の人でも漠然とは考えていることです。うまく整理して論じているとは申せ、ことさらに皆が飛びつかねばならぬような言説だとは思えません。

しかるに、サンデル教授の講義は、ハーバード大学で史上最多の14,000人もの履修者数を記録するほど人気があり、それがゆえに、建学以来初めて授業の一般公開化がなされたり、日本のNHKでその授業がシリーズで放映されたりしました。そして、その講義をまとめた本も、日米でベストセラーになっているのです。

講義・著書の内容そのものは昔からの哲学の焼き直しに過ぎないのに、これだけ皆に騒がれる。その最大の理由は、彼の卓越したプレゼンテーション能力・技術にあります。普通の人には、哲学と聞いただけで、難解な言葉の羅列をイメージして敬遠するのですが、彼は実際に身近に起きた事件などを題材にして、誰でもわかる普通の言葉で話を進める。そして、「1人を殺せば5人が助かる状況に

出会ったら、あなたはその1人を殺すことを選ぶか？」などと、問いはシンプルでも答えるには究極の選択が必要だと（一見）思わせる質問を次々と投げかける。聞かれた人たちは皆ドギマギしながらも「うーん」と考えて答えるのですが、実は、その設問からは、教授の話の展開に添う答えしか出ないようになっていて、聞かれた人が考えぬいて（と思つて）出した答えが、全て教授の話の進捗の中に吸収されていく。それで、聴衆は皆、自らが教授と同じ論理の展開をして同様の解に到達したような思いになり、教授の授業はよくわかる、素晴らしいということになるのです。

世の学者・先生というような人たちの中には、“やさしいことを難しく話す・書く”、あるいは、“難しいことを難しく話す・書く”人は大勢いますが、“難しいことをやさしく話す・書く”ことのできる人は、あまり多くはいないようです。むしろ、“平易な言葉では論文の格調がなくなる”などと、学術用語を羅列したりして、簡単なことをわざわざ難しく言う人の方が多いように思います。

しかるに、本当に実力のある人は、難しいことを、やさしく話し・書いて、しかも下品にもならない。その好例がサンデル教授なのです。彼の授業・著書では“難しいことをやさしく話す・書く”ことが、格調高い雰囲気の中で実現されており、それが彼の人気のもとになっているのです。

さて、この文脈で申せば、天理教の教えは「かなの教え」といわれ、教祖こそ、やさしい言葉で深遠なことを語り・書くことの最高の手本を示されたお方でありました。また、(紙幅が足りずに詳細には申せませんが)話の内容そのものを考えても、例えば“共通善とは如何なるものか”などのサンデル教授が論じていないテーマについての答も、教祖の教えにはちゃんと用意されています。

み教えを世界に伝えていく立場の私たちこそ、難解な学術用語で内容の貧困を糊塗したり、教語の羅列で論理の一貫性の無さをはぐらかしたりしないように、誰にでも分かりやすい話の進め方・書き方を心得るべきである。サンデル教授の講義・本のように、多くの人の共感を呼ぶプレゼンテーションができるように、思索・訓練をしなければならぬと思つている次第です。